



源註拾遺

三

卷四

玉鬘

初音

胡蝶

蚩

常夏

箒火

鯽分

行幸

藤袴

卷五

梅木柱

藤裏葉

若菜上下

柏木

横笛

鈴虫





源註拾遺卷

才四



玉々法々

右何者

こつふ

何多為

有反

加更大

飛分

沢華

海古左々海



玉手

一 あまのり

○ 今葉枯き 急傷よ 夜原の松
其由はあまのりのおりしを記しお月をありはるるち

一 何乃御りたるりめ

○ 今葉大くハハはなり

一 何なるも

○ 今葉等々たるも

一 何なるもなるもなるもなるも

○ 今葉なるをけりたるもなるもなるもなるも

たつハ梅磨なり

忠見家集のいふよりいふにたるより何うれめ
のいひらるる

音よきてめよのまごに流るる海を記すあはれこととせしむ

返り

年ふれと朽そまをれち朽むりかづの名をかて
袋草子よた見うき名たこといひらるる何
とらうれめとむきよのあことよきぬもたは
とらうれめとむきよのあことよきぬもたは
國よとらうれめとむきよのあことよきぬもたは
とあきいぬいあきいぬいあきいぬいあきいぬい
のありあけうれめとむきよのあことよきぬもたは

小見見家集のいひらるるをりてあこれ
いひらるる

一言 初めあたまもさくらさくら

○今拙とさるるなうらうら

一人の心をこころもさくらさくら

○今案 不賢 不敵 不肖 不敏 以上日本元

おもしろき人のあまをさかしくとてハあ
うらうらといひけなき子なをさかしく
も又このんあり 公忠家集の

ふみりあきうらうらとさあて故よりのおい 巻
重之集

をそねるをそのもとを思ひたる為たすよとあるはなり
一 舟水名のくぐりまをてこちして

○今案本朝文粹才三辨散樂策邑上天皇
河終云宜学狭猿之寄慈莫泥水鳥之陸歩
げはの舟を不用あり又万葉才苗東歌云
人の子にけりたてまはるうあをむむのをけり
くあしりたをくあしりてはるり何なるゆも
は是悩く演流をとかる陸歩のこころ

一 松浦築後

河松浦云あつこの説河松浦は元化神功皇后
河流石よりて流すまき屋とてしり仍

一 流と河

○今案け河海説ハ松浦流云あるを流出と
もひてかめとまへて流出ハ万葉仙是抄に
前凡そ化を引て万葉の中三も又巻前とい
はる河海ハ流

一 佛の湯中ハけりをらんりの布のちハ河
あるとてあり路をもちりてはるこま
え河んた

○今案三代実録才二十八云貞観十八年五月
廿日甲辰是先律師法橋大位長朗申膳備大
和国長谷寺是長朗先祖川原寺修行法師位

道明宝龜年中卒其同類奉為國家所建
立也靈像殊驗遐迹仰止云々

一つ天のちとつふ不平

○今案その世丹波市とつふ不ありとつふつを
をたんとつよまのれらる

武烈死云於焉太子思欲聘相設廟庶火大連

女影媛遣媒人向影媛宅刺令影媛曾好真鳥

大臣籍籍世云恐違太子所期報曰妾望奉待

海石榴市巷 万葉才十一云

流しものやとのちまこよとたつしむまひひもをとるまひ

紫のむひや守りのそつ天のれやらのちまこよとるこや守
これ丹波市なる之丹波市ハ山守郡の河うそ
長谷守まてハ今三里将何人サれもつ天市
小とまりてつよ日くれぬといそきたなそみ何り
乃ともあそめいそいそをいと何れハ丹波市
まあそくハ又流が納そハ市ハたらの市つたの
市ハちちよあまこ何申よをせちるまらつる人のか
なれそそよそまりれをららんをんの御孫
をる市ハとつとつこれよよれハつたつ
といふ不あまこあまこよをせよちちつ
たつちをいなる

敏達紀云有司使棄尼等三衣禁囚楚槿海石
榴市亭

用明紀云逆君潛自山出隱後宮

謂牧屋姬皇后之別業是名海石榴市亭

これ八同四丁市那之以上三所元とて景行紀
の終に存ありし海石榴市亭有り云々つる在
もさるるなり

一 川一らりき、何し〜

○今案格首と傳ふ仍まらぬやぬ時の一と
ヤコナリ

一 かりんもゆ〜してりし由也

○今案万葉平

一 いし何ぬ〜とめり〜も

秋山とゆめ人かすしわをれ外れの路あるおほほ〜思
○今案何ぬら〜ハほむる惜の字を何〜
ら〜とよむれよか〜人の今すやわあふもを
〜とよと思ふなりと源也〜ハ叶をすめたく
〜も〜つ〜た〜を〜知〜形の字のん〜
一 ひきたんこぬ〜も〜

○今案格帳日記よ

一 今案の葉也〜と表る〜こぬ〜も〜あ〜は〜
一 今案の葉也〜と表る〜こぬ〜も〜あ〜は〜

○今案葉葉牙九

つらゆまになぬふまの竜田娘ゆめををなぬかたを

一 ちの君とらるるまへに

細源の初世君とハ世とを以て

花智 けきことばは源自稱と

孟 け弟の事や源の室かると

○今案初にありてうしちやきりておや
めだくのこやふとてうけ君ハ源氏の自稱なる事
明らるるおやめきるといけさうとる人かとの事ハ
かりて意の上の何なりとせよまよは妻はるる孫ふ
るあふすたこくおかくつらかほまにける
うあはるてのこやふハおやめきたる御人

一 おうゆまなるまけるふらるる

○今案和名云说文云姬 和名於
無奈 老女之稱也

舊集云

いし人のおあけてやかくらり恋ありつんおらるる
女の役名ハ遠をなこれハ松の字を用てそのん
りたれりお女を於をなとていふハ老女 於伊を
を奈
ハ略称なるある松の字を用ひしうとおは
玉うらサニ筆なれとおあくよきいと
なると早下のやうよかとのこまへ

一 ちの君とらるるまへに

○今案ちとそつらちおりの何のさうこめ

ちり〜〜〜人よあ〜〜いつくのや。このあ
らんた〜〜いふんあ〜〜

一あてき

○今案 意女の若く世式アリ祀よそのころも
あつて〜〜あるもえ

一 意と云ふをいふを玉の〜〜いふ節を存せり

○今案 玉の〜〜と云ふのまうひの玉髪
ハ花髪人の玉髪ハ髪の人をいふの髪
をたすける物之玉若ハよるいのをほめ〜
いふ

和名 容飾具云 秋名云 髪音皮和名 髪女者所以

被助其髪也 俗用髪字非也 髪者花髪之髪
見伽藍具 河津の鏝の字を多ゆり

とよむより 和名あまえり〜〜今
いなる物といふハ髪之〜〜玉髪と云けり
とも〜〜と云る 髪ハ云る髪ありと知る人
日本紀お麻天皇紀ハ 押木珠髪有と云ハ 花
髪之類なり

一人の〜〜あ〜〜れきも又〜〜いあるものを
と云

○今案 今案ハ〜〜の〜〜ハ 略
〜〜 兼也 才十九

○今葉碎文集 細流よなるのをとるやう

よ何り又と葉おほるをとりよ

一抱よりとるけあうおほさる

○今葉伴勢相解よそのたきおよりいとし

一あめりやるの糸くさる

人志運に待もさく葉の老めりさくもさくか

○今葉は勢何よ出あるいとし

一捨るをくよあれあれた

○今葉万葉才十よいおせいあをを立捨

を引こくよあるよあれい

一あれハあれ時

○今葉万葉才十防人うり

あをたのかたれ時よ志まを三きうあたるきあはれ

けいあれ時よ彼若誰時よ今のおれハ誰時よ

何し曉も夕くれも何しあれハあれい

を同し心志まうきハ誰時よ

一やいよい

河朱草後漢書 福草日 材種史書 紫草凡士記

○今葉朱草福草ハ近世式法戸者よんえ

多り材種ハ或中のあるりあは感草ハ何の

あのみち記より出ある万葉和名抄よハ紫草ハ

むしあ

和名云文字集略云葛 音良加名佐木久佐 草枝

相值葉と相當也 今我解神祇令云三枝

祭 謂率川社祭也以三枝葉 飾酒飾祭故曰三枝也 さきハさいといふあれハ

をひくこの人の名も亦三枝之中アルヲ

稱年登とつけたり之あるものえうあり

す中何れ也 葛と三枝と名終りしれ

と心くそわう 三枝ハ葛をまるむいとさるす

あへ

一えちまのなれせういり

花十葉の中。草。今我解神祇令云三枝

○今案これハ葛之十葉の中。あへハ草花

神用樂千丁と何事

一御心風のまじりて霞もまきるまじりて花やあは

○今案指事集考 霞家万葉集の中

浅きう北辺の霞いつわもこほきそ白く花様を

けをる用あり物も徳抄考られし其を

いふはと定家ハ花様といふ一様ある事

を去り路をそ古き花様とよめるを

藤名との類。おひ路。在りさや

よめもあまのあねと又あるある事

はまけぬありうつ不物。花様のい

おひらき。花。よとて。花様乃

葩よふかきりたるなり

母之家集よ

五少れふふさうやきき花さくくさきんもわらわらふふよ
立枯る花さくくの歌かゝる様の下山様の上よんそ
花さくくいそくのをりて足ぬはくそほるふもいそめ
けつ子行二そ何り初の言ハ祈恒りあそりの家
集もろく 詞花集よ 系極ち改たたの家よ
被命一侍るるよめめ 康資王母
紅のくもさくくにはほほほいれさきくくそくそくま
けをを判志大納言理作の様ハ侍不侍建とて
芥子よめめある事なるあまてしやんれん何んよ
の康資王母のめくくつうたるなる

系極ち改たた

白きくちるるまきとくれちるるも花様くくよとて

康資王母

返り

白きくちもたていゆてくまなるあかひくくを君よそむきハ
ぬの様を侍る作建るといハ文選 沈休文ハ 侍り
山様用款様と作建るといハをいゆるよあきさ
もんもくせきくのなまきよ何ん

一 白ゆの長ハたかくもなしくかての路ハさん

○ 系集系系不防人ハ被り

流の系系よく系集よ七きくく衣よまきくくこくくたむ
かハきくくなりこくハあさなり

一 八たあそんちを

山を舟人むきぬ桜花しつれこみそ新みやえん
一かまう何るもちのふ命そあしぬあし

細架らあふまのこを想ひれ終り命ハえりあしぬハ
河あふふ命そあしぬ忘れとあふふつあそちうつ
右ニそ何よ去あしよ。

一 竹川うさひてよるすす

は舞のまうあれとそえ自き部はるあそちひ
てかよれる神と何り

○そ葉かよれるいたよるをりあよこまをわの
そ死やすきをわあそきとらあし

萬葉中記よ

秋の田の徳園のうらがう何んそこり人のこをとあえん
催る来 総角もまらひあひよりがうり何し
あうるとい屋り竹河の老よ竹河もえんとえん
一のめとふあそよ。ほろしとまもらよかれば
とそふああしつとあしてこあつそよりあそ
一ころむまやと

○そ葉 万葉中記よ

流ののたままよあつ井の水をたまな妹がとてよ

胡蝶

一かゝめあふつらき花ひらりあがりたるめさせ
路ふりき

○今葉在る難言中務のこけ家の池は舟
をうつりておりたるめそあそひはる日さ
一もろもろ乃つとむをちれをあそひつるそ
き枝もをらひてとむちがふ

○今葉こを匂そをりの波のあやかとむ
一しり葉お才十

去夜あそびをりまき柳の枝をいとちく常はるよ
日才十六長忌寸念吉磨祿白澹咏木形歌

池神の力まきひもりの瀧のほこむとちて飛らるん
一まゝかう乃んく

○今葉竹香とかく
一昔物松をらん路ふりも

細 佐香物松もそし
○今葉佐香物松は小葉院の御方をりて漢
よりハ路のよ出来あるあなり

一あやこの松のとむりそある事たなく
花こむひぬあやこの松のたさ翁よ出てあつるといふ
けむいあや出まるといふそ彼奇ハ六帖よも
胡蝶集も重之集も何うと云て

○今集 胡蝶集ハ見られたる所ニ枯子也
 手之集も見え居 急事集も
 二集より今ハ暫く此の松の葉に
 しよう知る 芥のんえしり

一かゝりよほのまてて

○今集万葉不十よ

梅の田のほもきよめらかぬよりよこれお思ふしきをばらぬ

螢

一今集れららかよ

^{今集}あまきききたたむ秋夜のはれ和和良あふおの
 けあらら地あしとるハ葉集はほり出れたるあ
 こらえこれよあふふらととるを
 西をぬえくこらとるを

一今集つこあまん

○今集 神をひきつるをばらぬ
 せそとをわつけ路のつむハ
 一あつるをくはし
 ○今集 今集りてあつるをばらぬ

音押よりきき起して出せる漆漆ウツニをとり紙ハのいし
ききおこさるる物の紙をよつてまねるるや

一 石のりあましと 壺 會明ホノカ

○今葉不の六万地不形芳幣を用あり會明ハ
あけるのこ

一 朝の志川くもくもくしはよ

○今葉催る由中

あつちのまやのあまらぎ家ちぬきぬきの戸
けあのををぬくくりぬく

一 ちをいしにけあくもあま

○今葉をとういしにけあくもあんとん

一 今おにぬあつちあしを

○今葉ちうこの母の人のまかぬをんをぬと
いぬうりふをハ源氏さまの歌よにきぬきのん

あまを歌もいしうう一歌のれとをどよ何うそ
あつちの津ををぬくハにけあまあそひも
あつちけしとよもなれをかれまこれま
つらぬゆ急よ人あぬとハいふありさそかり
そめも歌といふ人のけさうん何れを世う
あまやなんとあけん

一 今しとんとちほしをあれとのこま

細形のよき人の何れをこれあまの人のあまし

○今按 細流の流い等々つぎぬ々ありすか不
しそ 質相ありあふ人をやまといひも 俗なる
をよハお月々この人ハ形よりといふも 俗よ
こそ 所ををけ名アハよりといふよりこちを
ハさく妙なりと ちうひとそをハをハめた
たまふよを知へし

一 亦不あるをハよりといふ ちうもけたまふ

○今案 世なるを何よりいふたむを何事(と)のこ
まうとといふはハクえなり 万葉集七

^{モクアララニト} 然況 不有跡 上のたふさまりとをゆききハさくらなり
はあまを言ふはハなる何しとくよめ家

存よけ物 花宴ありとたふありしとこふ相
あはし 流よけ名をさりし志れえ花言里の
け流よか事よかアこれよりとたふこまをぬ
んよのりハ流氏のこと 世もさけたまふと
ちうけ流よいハ流き人の程あれともその人
あちをハよりハハ何し

一 そのこまもはけぬる

かをてあてうん何を何やめま 歸く 物めさめはゆり
○七葉 後拾遺 後撰と引連たハ流え
又とふ人をかると改めさま何やまあ
集よ 昔あたるめさるまうつてよの侍なる

何れいふ人といふこと

又惠安文集の青菫庵ふくをををこころよむ
くしてこころ

家約のつひはよめはやめまけかしてはりやそれ
御座にほ旅遣は今の惠安文集をたれをを
難きしきしはう屋うて得なり

旅遣は二

祈恒

おあまのこもよめはやめまけかしてはりやそれ
花菫里乃方の心これをたれををたれを
惠安もけ祈恒およもれるたれを
又元去集

約してよめはやめまけかしてはりやそれ
一に不智よりけをたれを

○今案に不智をたれをたれをたれを
ころころ不智や立才十八にも不智のたれを
はひぬしよめはやめまけかしてはりやそれ
ゆけしよめはやめまけかしてはりやそれ
こころのたれをたれをたれを
よかゝ縁の詞なり源氏のたれを
あやめしよめはやめまけかしてはりやそれ
一ころ約は不智をたれをたれをたれを
を八用人うねはたれをたれをたれを

んも高瀬をよもよひく日なれはりなすはひくも
いなり 殊射なれおしおくるもやとてまもせと進
をうけてけよよ用なき 驚コトなるてあ弱を
あ驚コトよふよりしていそんもさうりうらあ
一はみよりひめもこ

○そ業を世の何る位を物後よは後推進よ何る小業
院入喚のよのそ多しそ少ゆるれといふ方を引用
しれえけ物後よ引つてもあはむむうのほう
せてあこのこまるをハちつけしるよあ
一はしりくかうん
細おろりくもなるりふ初こ

○今業ほしりハ殆のまをほしんごもむいけ
そらくを音係かくりあえ 危殆ともほやう
しとむむののらも是よあか 殆事ハよあ
をまえるのそを濁るえ 殆あるを程し
いハうの事りあそあの 殆事万地あ七統路
みぬれそものたうらそむむ 殆さうそ
てたのらう事ぬ 推進は業雑意
あつるひああたふあなのおのれりくめをも
あこそハ殆あり 六指
あのおあれきこさそあをえの程くもありし
あこそハ殆こしよあ

一 かしんつり

細くあつなるこのんつくりなり

○ 今葉斤心有る一 俗もかしんかるといふ

之也斤考斤思斤月斤耳有るの類之俗

斤之也考斤思斤月斤耳有るの類之俗

一 今葉のそいともあつてもおあするなれと

○ 今葉の中いともあつてもおあするなれと

をていあられけありのありのあつたよや

一 今葉のそいともあつてもおあするなれと

○ 今葉告のそいともあつてもあつたよや

とよあつたよやあつたよやあつたよや

常夏

一 常夏

○ 今葉和名云四聲字苑云氷筆鏡及和名也水寒凍結也

膳丈経云立秋後不得領氷漿今葉以氷入漿也

一 今葉和名云唐韻云編糲編索二音和名比女風説云非米非粥之義也

一 今葉和名云唐韻云編糲編索二音和名比女風説云非米非粥之義也

一 今葉和名云唐韻云編糲編索二音和名比女風説云非米非粥之義也

一 今葉和名云唐韻云編糲編索二音和名比女風説云非米非粥之義也

一 今葉和名云唐韻云編糲編索二音和名比女風説云非米非粥之義也

一 今葉和名云唐韻云編糲編索二音和名比女風説云非米非粥之義也

一 今葉和名云唐韻云編糲編索二音和名比女風説云非米非粥之義也

くぬやと

○今葉葉おぼゆるきこまへえ知傳つたこと
てを江の尾のようかぬるをわづらひし
深氏も相傳へさるうのおち世をあるひら
とのさふたふらひの細流咲花の心なけ
まももまてし御んくはくをいつう
しとありしことあひあつてしちたれん
するおしりたるの女もろくろくんといふを
にたれ水やまの月のくまうはたえそれよ下
んも何れいひたてて咲きさるやうよのこまふ
よこそ

一 おあしりやうと

○今葉河海は伊勢うを引しまへり御事とも
これハ松達雑下 後系為頼

ぬも人の立田の山なうおるうのなるわけま
け新そたれね御やんもまうさるかこ

一 いとたれぬんきよと

○今葉万葉集の山上憶良の哀世間難住歎

老て人よいとをるを

あつらふたうたなごてかゆけい今よをえかゆけい
とよわれういをえにうまえいをれうま
れちり

い門ふらむをいふに海草の中を走らしてをぬくをいふ
一 さいのうちあらふ

○今案貴在深窓人不識 長恨奇

一 夢あきて見たりと 夢をいふ

○今案万他亦上

一 一とよいこれをもいふやと 一とよい

○今案陰合のすのあけのそきと一のあやあ
る竹をよるのそきと一のあやあをいふ
そきをいふあやあはよるあけのそきをいふため
ちれいあやあは

一 和琴

花実あはるを張をたへて活を打あはり
より和琴といふあやあは出あはり

○今案弓六張をいふにけりよりあやあは
るハ長明のそ名あは見えたり或書云今琴之
神天牟首命並張臥海張天真弓六張而調
之鼓之け部者是飯井宮之玉琴社神

一 一とよい
○今案

一とよいぬいさめあやあは けりあやあ

十のたつによろしんつらてわらんもあう
○今葉五のまろふ物としりいはるゑんぬの相を
既しつたしそ女の意をさるゑお慰せぬれを
へし秘浄おは帝はあまき救珠を拈念佛
をさるゑまをさるゑいあまきぬよいかせ強ん
る勢え不動の平言おわき中よ今うとる是
念印慈救兄たえし一叙平のさあましく慈
救兄もあらうら。つやも言うく強ぬお慰せ
ぬれよえうおわよそしりまの佛菩薩等の
平んも女をの強ひ強うんよらぬんし女
の信をへき信よいけし。業作さるよい地

藏親音て女よハ安方天女言譯て女をし物そ
おゆよそわまき菩薩等と天女の勢しりまを
ひぬし不動佛三世等の明之多同持を等の
徳ををいたるう。徳を。たてまつり或いはり
の勝をつけてたふし。拈佛おはあまき
たんいまをよけし。そ。信男女性信
老幼を強ひてこの用をいへんきとん

一 信子の姫君

○今葉うのちお強よ東よあま強なるを
防るしひ伊勢お強よむしうのあし。酒
かんこしよ

○今案 試言よん

一 祢もてゝるあ志づゝるひも、後ひそ

○今案 祢也ふすは祢の字 禱の字もは祢く
とよみ、祢の字を祢うかといふもあかひんる
祢うつろふ志を祢とていふも、玉部をさへめ
自他のもを祢とあまけてまゐらふまんと
祢るものあるれかり 社の字をこそとよむ
たこそいふんえんこの字をもこそとよむ
あつゝ 彼社也等もあつて不祢をこふ社
のまもあるれいこそとあ付あるるり 古
祢字をさめをうんやろそをそにけしめをさめ

一 祢かゝるゝるゝるゝ

○今案 人のかゝるゝるしてこ

一 せゝいゝゝ 河小賽 和名

○今案 和名按 第四雜藝類云 雙六兼名苑

云 双六子一名六宋 今案 薄夾是也 薄音 又雜藝

具云 双六子一名一宋 楊氏漢語抄云 頭子

双六 五佐以今案 雜藝 双六 見 和名 十六は 詠双六 歌

何れ 仮名よ 六 佐敷と 何れ 頭子をさといと

いふも 宋の字の音を 和語よ 用ひしゝるちり

小賽の字 和名あつて 耳あ

玉篇云 簪 先代切行基 相塞曰簪 簪ハ此字よや 玉篇の

泥のふは甚るけうとまを筆とりふもや但
塞乃字換得切もて散也と流しあれは
さくちまは後代切もてハ隔てしはまハおま
及をよらしてとんと止るをいふはしりま
ても甚よつとある字もそみちの案といえ
一てりきせりー流して

○今案をわくも既をりくハゆるるをぬる
の申しをさきいしれぬ時のことあり

一この人もさきいしれぬ時
○今案をぬれりしハ五節もさきありぬれ上
をりぬる上はされりて人といふはけり

一かめちいむちり

細泥土ちりぬし ちりぬしーきこ

○今案俗よりぬしきをにつちけの人をぬ
ぬしりふ類なるしー又案はるは臂近りて
のしりしきをとりぬ佛の三十二相の中もあ
碎傾直摩膝相又諸指圓滿纖長相とて有り
古事記に日本武尊のま筆媛は湯へる御奇
もも天りる神のくまひとがまはちりあるしり
かそながやくひあをまるとこれいされし
けふは美筆姫のほそやくはあやくなるしり
をぬめりぬしきとされぬもも指をぬる

てうりやいけあがねいひるをこそ
飯をちまへてりしは

一はこけちるを

○そ葉河津の二流を細流はもとては
けすの案よる一もとのこまへる花はけ
物流の世云やまの河の末摘花の鼻のや
けぬをつくりとよる花とおほれは
とがちるなりといふんて

一初こひのいとちやけけるを

○今葉まゆと額との男のうまきをとり
乃三十三相も額平平とくほのうり額
の

みしやいやくくも物るをとり

一おほまほつがとり

○今葉和名云周礼註云藝器藝音思謂清器

虎子之属也

今葉俗語虎子於保都保清器師乃波古

大壺壺式尿壺の出

御虎子也

花壺

大壺

尿壺の出

不いまるは清器ハ世ハキマるなキ事
をたそしり空活拾遺もあつたの人はあのみ
かきそれいたことぬりしりやを何あるか
かきよ一あきのたそしりハキマるなキ事
いしりそと物の名をも略してそしりや

一法法ちのくたう大とこ

○そ業云代実派才古云詔以近江玉造賀
郡比良山如法最勝兩精舍為友寺

一何えものどぢん

○そ業昔之歌集よ天武六年正月廿六日
納言殿の清しせうくそそ奥袋をつくら
せんそそあはたさるるおろそくそちひ
ちうちうそそ大敵よびうそそあめで
そむうそそさうそそ作らしてあえの
そそそそつげよそそつひてたまをそそ
そそそそそひかこそそそそそそそ
のり松の枝よはげてあそそそそ天皇紀

肖此云阿叡とあり何やうもあ

一いよよそそや

○今業河海よりそそあ言に何なるそそ及見

後撰恋二又指述 恋五よ

あふよいふそそあふそそあてふ思ひたのやむか

一うたせ川よそそ

何れを眼よたふこよそそそそそそそそ

○そ業けあ何よ出あそそや

一そそそそひあちのそそひのらうそそ

○そ業 元喜歌集

あそそあそこの路のそそれ貝そそひあきあそそ

河海子 蛤粉 日化を引きてあるいたる厚く

一 おなりん水のと

○ 芍薬 芍薬

みずは 芍薬の肉をひくすふふのゆゑ 湯のうらん
け三は白きんをえましくん

一 鹿茸 鹿茸

河粉 白氏文集

○ 芍薬 和名云 萩名云 桂粉 和名 桂赤也 漆使

赤所以著類也 今按 桂即 類字也 又云 文選好

色賦云 著粉則太白 和名之洛 岐毛結

粉ハ 志のいさのたる 年 附 志 する 事 あり たら

文選子 類粉 何を河海子 引きてあるを
わすれしとて 粉の字をわすれしとて 文選好

簫丸

一 昔も衣もろくもさびりやいあち〜 孫ふよ

河 六帖

秋風の涼しく吹たわらせこゝ衣のそらろくや
六帖よ六帖のむを河風と云

一 折松

○そ業定盛のちよりうづまをり松たきそ
とよまたまへう押れて打たるまハ折松を
折松もいんれ折と打とまうふへられハ折松を
折松しかきちをこす〜や

野分

一 洗くうとあきさる 形くのも

○そ業た今よ 仁和のみとみこよ おまのし〜る
時あきの滝御覧よあつ 海をとて道よ傍正
遍覧の母のま〜ま〜う 流ひらる時 遍覧よあて
をれらるそ のとちも 産を秋のゆよ〜
つ〜と〜

一 古〜〜 おま〜〜 ろく

○そ業 業業 業業

和風の涼しくなるぬるあてい〜ゆ〜ゆ〜るる
一 あ〜〜 其のおま〜の 花その

○五葉浮檣集

作勢

一 板の玉の疏ささしきりしをたてあつて板のきりかた

一 板の玉の疏ささしきりしをたてあつて板のきりかた

○今檣浮檣

一 去のあけほの 震のまよりありしきりかた

一 去のあけほの 震のまよりありしきりかた

河朱檣 和名

○今案朱檣をかし檣と一 疏ささしきりかた

草云檣柁一名朱檣 和名波し加一 云近波佐久良 かし檣と一 又木

具云玉笈篇云檣 戸港胡化及加波又云 加仁波今案檣皮有之 木皮名可以為

炬者也 此玉笈篇よりいふか何の木の皮と云ふ

木の皮の炬と云ふは、木をたてて檣といふ

万葉才六赤人長檣と云

櫻皮纏マキ作流舟二真檣貫マキと云

和名今按皮有之と云これあり炬と云ふもの

ありしきりかたの器ありしきりかたの用なり

相之檣委ハ木子細目檣のありしきりかた

をいふは、しきりかたの檣の中より檣と云ふ其皮を

用むるは、しきりかたの檣と云ふは、又くは、

舟の深きなるれハ、檣のなるしきりかた

河海よりいふは、木子細目檣のなるしきりかた

松葉よ截くまじつる月よ花梅りあし
あれハかえ梅りをいしきあるハ梅をまじと梅の
あまひらやうを梅とはあまひらえいつけて
まをえち花梅のこく見えより大か梅ハ
取られたりせんあまひら

一我ら使はもつる月をくまじつる

○そ業古今よ 忠告

あゆめはくまじつる山の紅葉やとハゆきより少人の神ぞえそつる
昔せころ白妙衣ゆきゆめはくまじつるゆきをまじつる山を
一目のくまじつるゆきゆめはくまじつるゆきをまじつる

○そ業 思ふゆいけしめよんめ むい

てらまじつるゆきゆめはくまじつるゆきをまじつる
とののしゆあまひらえいつけて
くまじつるゆきゆめはくまじつるゆきをまじつる

一ちひらきつるゆきゆめはくまじつる 梁成 孟目

○そ業 思ふゆいけしめよんめ

○そ業 古今よ

凡の上よあまひらえいつけて
一ちよ竹をえんあまひら 藤竹

○そ業 古今よ竹を藤竹とかなるゆいけしめよんめ
るる大くこのあまひらえいつけて 和名抄云

兼名苑住云長間争今案和名之乃女北長間争を俗
日なよきけともをんる竹ともと

兼地ふ集かニ云

奈用竹の騰遠依子等者云

名湯竹乃十縁皇子云

よとゆと通あるなるこれハある竹と後

とをよきけといふをよきけといひけはたを

を志るやうなるよきけとあるハあるよきけ

と何の深氏のゆきか及

一毛そびり

孟をきけておこをす。おこ

○今案兼名乃十云

處女等之麻笥垂有績麻成長門之浦丹

け麻笥乃るは細流はゆきをけなみのぬ

くひしと何のゆきをけは績麻笥之流を流

ぬは流をよかぬとよきけ今案解

産卵は摘採をなす娘流は絡採麻笥

をなすといふは麻笥水桶とけれはこれ

こそおへ水桶をけといふも麻笥より

おへといふ名はかたし用れあるあ

一毛そびり

○今案あふくこそといふ常よりす

一 風をきき村をこやまのふたも 忘しきまのいふまにぬき
 の今業 兼多分二人九弁。
 清のたのいふもやまのいふも 兼多分 兼多分 兼多分 兼多分
 これも多きなるぬきつるもいふをたえさう乃
 兼多分 兼多分 兼多分 兼多分 兼多分 兼多分 兼多分
 まぬるたのうらまのいふもいふもいふもいふもいふも
 らをいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

行幸

一 びおとあゝの滝さう

河系明ふんめつをまきうててあゝ音の滝

○ 今業 けい何は出さういふもいふもいふも

一 上達殿の部 たらふもいふもいふも

○ 今業 和名云周礼註云帳曰帝 羊益及和名 比良波利

一 よあけくいふ

○ 今業 竹をたぬたけもよあけいふ

いふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

あゝの浦のその長流のよまの流ゆけいふもいふもいふも

一 今業 けい何は出さういふもいふもいふも

○今葉万葉才十の二美情をくきこころと
よめりお月よそ美の字をけとよめん事古
ほく殊の字をもけとよめりは字こ

一にころの末よ

○今葉流季の心なるよまきてよめといひあ
侍まそといふあのをするれたりををけて
い原の男女たうしてお流をすむ一き水こ
とよめあちやくけらめといひも流てくころ
強あ知る

一いしんはるあなれ

河思馴 抄 面馴 記

○今葉面馴を用へ

一記しあよういあとおほしきそく事ハ

○今葉内をたの人よあそああつともたはハ
そ及を思葉して用んきとるまおちるを
おひ路し事ハ

一十の元んのをめり

河 彼岸無法成道経曰き

○今葉花野の月原よんえん侍院あ人
まて彼岸といふるハ世をそつらるる
原 晴野地もんえり

一たふあまかたなきふ打よそあまも存ぬり

つとろえ

○今案よき人なる少原をそ人のつとるを流
あり古令よ奥丸の洞よりふあつあつ
とよめよりいりあり

一はてもたひりるがゆりうあつち出給ふそ

○今案ゆりうあつち不意を日本紀よあり
折よをよあきんたといふ不意をよあり
いんよあかふんあつちあまぞうりるあつち

一いそやま

○今案うかろくをそとそあつち

一いそ

細いそ

○今案日本紀よ勅ん又勅乎を河守ハ依
後をいつむをいそといりあり

仲哀紀云又筑前伊観縣主祖五十迹乎闻天
皇之行天皇即美乎迹乎曰伊獲志故時
人跡五十迹乎之本士曰伊獲国今謂伊観
者訛也けいそといりあり
つとるめりあり

又續日本紀云勝室二年三月戊戌駿河国守從立位
下於原造東人等於郡内慮原郡多胡浦濱獲
黃金獻之使金二分 沙金一分於是東人等賜勅臣姓

文德實錄第四云仁壽二年二月乙巳參議正四位
下兼行宮內鄉相模守滋野朝臣貞主卒貞主
者右京人也曾祖父兼博士正五位下於原東人
諸通九經号为名儒天平勝宝元年為駿河守
于時土出黄金東人採而獻之帝美其功曰勤乎
臣遂取勤臣之義賜姓伊豫志臣父尾張守從
五位上家譯延曆年中賜姓滋野宿祢
出れりそ志ししきとつとむらうが
そきをよひたぬ之仕事をつとむるよひそ
たきんそいそしと必すしるはれしは
詞ももるし

一 ^{雜役} やくをもしもちをりてやまをまひりりつ

○々案景行記云是山海耳可立タテ跡渡

万葉才也

一 ちをいけはやくもつえそ 出まゝあり

細 ちをいけはやくもつえそ

○々案日本紀云云德野高倉下忽夜
夢きて高倉越唯唯而寤 世よよむらひ
てハ何といひてむらひていたるとハ昔ハよ
むらひてむらひといひるよそ

一 たのこふりそなん

○そ業あまのまてしよのむん

和名云声韻云黠比角及和名布久流肉憤起ル也

一 云し〜〜か〜い〜〜されよ

○そ業捨幣花もけ初を美〜〜俗よ

もりふ〜〜

一 あり〜〜あ〜のんあ〜んを

抄こゑよ、短歌といひよ〜〜いあり〜〜ことと

○今業系あまの竹調一首短歌二首三首あり

あり此短歌といふは三十一字ちれを初めありき

初め長歌二首といふは長歌も長歌ありき事知ぬ

〜〜又長歌ありぬ〜〜長歌の字を短歌短歌

あ〜い〜一絶をといふ〜又才也。思見等歌七首

長言又才十二よけ月者君将来跡〜〜及歌葦

短言遠世雁之翅半見〜〜右三そ但或云け短歌者

防人妻所作也然則応知長歌亦此同作焉

あ〜よ長歌短歌と〜〜形事〜〜明〜〜又續日本

紀才十九。仁明天皇の四十室算を賀〜〜

〜〜真福寺其尼僧壽命経を四十部書寫〜

其外〜〜の歌をあり長歌二首をよみ〜

〜〜て〜〜ま〜〜其法如命〜〜れて公家〜

〜〜海流〜〜し〜〜め〜〜き事〜〜て〜〜

〜〜も長歌といへば長歌をさ〜〜短歌

と云ふハ極うたなまに 刻るに此るハ定家ハの中
終るおもも 万抄など 委ら考へて 父復成に
乃千載集を 綴款として 長款を載せたるなり
うけぬるはりの 毫路へ 已新勅撰集廿卷
才十志より十九までハ 綴款を四卷にわちぢ
一字の文を 綴款として ありハ 雑件ありハ 雑乃
ありと云て 雑字と してんさるに 初ハ 長款
旋既言われと なるハ 標せしめて ところ
よのこ源政長朝臣の家より くるありこよ
え侍るハ 勅を述懐と なるハ 心をよめる 標中
納を通俊と なるハ 旋既言われと 傳を

くるハ 是のころをよめる ありと 書て 抄の名に
して 抄名と 標して ありハ 心をよめる 標中
の 納と なるハ 長款と 標して 中古以来の 撰
をこしす やらなる ありと云て 綴款と 標せりハ
このころの ありハ 雑字と 標して
何そひたるかと 長款をのこ 標せしめて あり
より 像に 標せんも けや けられんも 書よ 志
せし 是れ ありハ あり
万抄の 撰者 時代 長款 綴款 ありハ ありハ 志
ありハ 一巻の 中ハ 長款の ありハ 勅撰 ありハ あり

一しと云ふは ありハ ありハ

○之類には抜きよ

義考

わきまをとり合ふをいふの月書にうつる人おすれ
をいふといふはまじくうらぶと一向に
あやうきといふ今ハ異をいふことあれ
るは人のむらうをいふも守るべきは一向に
よるそ人のあやけをいふことありやといふ

藤袴

一うけい 藤ふん

細呪咀のんえ出るやハ多し何ハ後ハ思ふ
○今按日本記の中ハ神代記ハ新字の一字契符
此文字も一うけいといふハ神代記より
ハ初めの字をうけいといふハあるハ
記ハハ音をとりて後名をかくるハハ呪咀の
あはれ字のそく知んハ呪の字ハ神代記ハ
あはれ又のろふともあり呪の字ハこふ
ともあはれともあはれともハ乃知ハこふ
あはれともあはれともハ乃知ハこふ
あはれともあはれともハ乃知ハこふ

方を引ひてのうらるのやうおのこころのうら
らふきいふこまかまりていそは

一うげたりて 河清果元 諾日

○そ葉世あまも日本地がよめるは
諾のまう人なりとよめりうらうは同し又
せともよめりしなとん

一志のひらくおひ路へうらうかえあれぬき
まそゆるむていとおうくゆるものを

○今葉 拾遺

葉をうらまらるは後引かすまおゆる水そあつ
限おれらぬき十ヶつ葉衣をそあきおし酒あがり

後拾遺

○ひらくおひ路へうらうかえあれぬき
千載 なすきうかすまきたる葉衣あはるは折えぬき

一け御あはる衣のあはるいえこそ思ひ路へま
甲一りりうたれ

○そ葉あはる衣のう法抄の源ぞれぬは
かぬあはるや

一うたはる思ひひよあはる

○そ葉うらうらういれえはななり万葉和は
やろ木もよりのうらを打なす人妻といふれぬは
打たはまらまのむらうんや思ひえんは
打考へる人あつとあめをてぬまうりき梅の花か

ありきぬのありのこらう打ててをる布を日に出し
晴れ日地云守師のたしめもさうらへる秋の山人
を存の路少し何しさうらうまなこしうあた
まひあそ純のこらうとえせ路くんとよこそ純たま
一 おおあーゆのあまゆり

○今葉ら川不物流よ

おあゆのあまゆりまよとまよねまよのこらうがま
け弁をおもくさるよや

一かーこも思ひより路ひたるくれ

細あ人におそらうー思ひよとこ

○今葉かゝるかこまいふよとこいあんと

きも奥の思を居とほきう若葉よまやう
きもこしよをさうたかこまい日ありとけうて
とんまよ 眺鞠のいあよい日るうとんまよ
一よーゆの滝をせうんよりも

細あよをよてゆゆの滝きも別しあのこらういんまよ
○そ葉地りまあるきかす人のこらうをいらた
のまんとさ枯ゆゆの女をんあれくまあるとそ

純友別

なるやまのまよこまのねとあまもかをわいてたのまん
かしてはまの友別在不遠ま純君之凡河内新植
あめく十月いけしうまよこれ新植うん

一いふそやこころのこころとあまのこころを思ひ
残るるて

○今葉いふそやこころのこころは夕虫の音の音を
あのかういふて

一いせ山ぬき道と

○今葉細流よふふあふふとこのまはる姉山
背山をえ左を姉背山といふ此言ふふ
ふよふうあふふの人今ふふまていせ山を
ういふて

余いふのまをこころあふふいふ山のの姉背山
背の山いふは姉の山の南ありて其申を紀川

といふ山のまをこころあふふいふ山のの流
はしを姉背川といふ言は川の東ありか
ていふ山あふふいふ又北を
新いふ東のるをいせといふありか
けあり又同卷は

背の山またいふて

打橋り

これはいふは昔は橋をいふけうとこころあふふ
たえの橋をいふいふをいふあう姉背山を南
はよふていふふふいふいふいふ

一葉もおしこころをいふて

○今葉たれあふふいふ先帝の御時兼香殿乃

御身中の内さうしよ中納言の君としかんさうさう
ひらうそれをたをアハのまこら男とて一命と
すえそあこの路なる法あひて福とまひ
そめそらうさかか兼女殿の主人の松と書名の
降かうしうらるを折てわかなんすえそらう
こぬをまのたふやう日書あきえそそまあぬ思ひ
そてらんゆのけ書おとそれと流しひよひてかん
きてま川アてらる

これよなひてりるあそん

一 御使さそらちあひしそや

○ 今葉いとかけあましなれゆかち

あひそやましくとまてやうなる使とりかあるん
そあひの使よあまきうなるをつちたうた
よと書まといかそくものおひよこひそらる
よをつちなる使よえぬとうてこつち
そけちうち何んか

玄米櫃

一乃おそくをさへけちるるをもを

河多 ソコラ 日本紀 幾多日

○今案日本紀ハ若干をそくしと滑つた多
の字ハにてもさつともよめつたはおんまにん
又甚多とらるるをににまじりて跡しつらそくし
よめものあ一乃おそくまをくことたははら
そくしそくまあくとまじりてそくたをりふ
行せぬしつらつり

一乃おそくまのぬめりて寺の久もあつれん
○今案おそくまをくを再思と玉首と
并

ともさあしよまちの佛をも并のおれしをまか
ていぬまほしくおそくも何ハ再思のるひ
新事しよハあしつて并のおそくとせめつて
新なるをえ一演りて事ありては玉首の并
をそくし路ふたよこそりおるるそくまに
かろしけちるるをもをとりくまはら
りよいぶをけしる御まのまは防備あるの嫌
もとりくまをけちるるをそくしつて加れ
たそ此并のおそくをあやくつまはら信して
観音の祈りあるまをちの志願も何
をれらめとりふるん

一ありきちてくまひるひともわたり川

○之業世渡川の 河へ未未ありりれしと
け三の内ハノウ下向ハ夫婦のうさひき人
引渡すこりふちれハノウ渡さきして人ハ渡
させしものハ船をせうしとて 互ハ釣しを
のこちきることりハ何ハ船の字をちきりし
よめうむハ船を今ハし魚

後明船は業云とよろ三君をぬえくる法女
こひつもの世ハかんこころ川のちれあせを渡すとい
ぬ

舟の世をぬひもるきそこころんはなすいぬの念を
ぬ

ける平女のおちち和物渡り酒をうらうらと何う
そ玉盤芳の西宮舞はほの酒ハ世あそくろあそ
一をれらちうと渡りそをい

○今業コ業おも世酒あり江時急必決もたらるえ
一ころせ川コ業ぬサマコ

○之業ころ昔川を渡りしけハ引渡すえといふ
何うてうらとけ世ハ今を渡りぬの思ひ

と消をやこいあくよめなるんしよりてか不
處の御景やこハ源氏のれあまろく 河海ハ水深録
日本紀ハ水深を三載ともある所 延喜式ハ
水脈を三載ともあり 和名抄ハ水脈船を三載

一 夢のあひこよあふ

一 夢のあひこよあふ

○ 今葉 夢世 芥七

こゝれやまの何れも見えぬ深き夜に月こよめえよきとほ

日土 旋 既 寄

園にまのたこさるるを人なみしあつても君きまてん

六 佐 芥 三

日れ川ゆく及前とつてさといふあつてもたぢらるる事

一 御 夢 の やまの 何れも 見えぬ 深き 夜に 月こよめえよきとほ

○ 今葉 遊仙窟云 余時 把著 午子

一 ち ち ち ち

細 ち ち ち ち

一 ち ち ち ち

○ 今葉 ちちちち ちちちち ちちちち ちちちち

ちちちち

一 ち ち ち ち

○ 今葉 ちちちち ちちちち ちちちち ちちちち

ちちちち ちちちち ちちちち ちちちち

ちちちち ちちちち ちちちち ちちちち

ちちちち ちちちち ちちちち ちちちち

ちちちち ちちちち ちちちち ちちちち

一 ち ち ち ち

○今按 浮櫛

ちるる形もみそを造ぬしと傳ひける年のぬきえ
一よりうきも思ひしるおこせたまたり

○今案 下不神の氷てとけぬりといつげぬれと思ひ
は火をぬしとせうあこせもそ 浮櫛 浮櫛は

水の下をうきぬ思ひははらうの氷もさうやうなら

一御大とらりめして

○今案 和名 蒸煙 此度 刑

一そろあけきをうちいへ

○今案 金塔

讀入

たうるめるこのまにれ 蒸煙はそ なるかたはらうや
あいら

一お月やなるこのりなりつひとら

○今案 和名 蒸籠 方言註云 火籠 多岐尾 乃古 今蒸籠

一さといりけぬ海

○今案 今案 蒸籠の詞を 蒸籠 ぬき 万葉の件
の字をぬきぬきぬきあり 口切記は 撃刀をこす

くやたよぬきぬき 万葉は 剗太刀やをぬきか
いこ山といつげぬき いくとりのこす 射ぬきの

日の影のおよぼしを射ぬき 射ぬきと 射ぬき 火とら
の灰をぬきけぬきぬき 射ぬきを射ぬきぬきぬき

いふは 細流は 沃也 ことあり 沃のまは いくは
らん 沃也 地のん

一牙やえひえくねん

○今案新撰万葉恋歌

なま川流れて神の氷とけしよぬきけり八牙のこひゆん

一まのこいといま

河傷にほめくす初

○今案いまハ痛くそんろふんいつまきあり

お方のるをりふまき君下を河をぬきほめくす

てをるはそ河に

一ちくろんよなうりぬきま

○今案二佛の中間チクハぬえくははらうらふ

つらたをくぬあるん

古雑小五人記 本も河にまもあぬ竹のたけり家オちうりぬき

問人とりふ氏の時間なまきとよむいけを

きよけその中なるをくぬ

一おのあえせん

乎くちたそく系う路く時の程母君のこひ路く

○今案世よあえせんての栗花の流路く

一かくりいのせきて

和名云 櫛鬢髮 啟

文選云 劫髮理髮

李善曰通俗文所以理髮謂之劫髮音雪

釋名云

毒盜道寸也所以導櫛鬢髮也或曰櫛鬢櫛音歴和名賀

美質 岐 けあま名つくるん 髪搔をかきを音使子

てかくりいひかきをを土着也

一これらに記す

○今案これにも又位するあり

一あふれきとたる

○今案やまも君やまの守の漏を兼つ

一ともかくもいそがれ水

○今按離れの此ひよともかくもおもいそれぬつり

一まらり

○今案日本紀の獺のやまがとよも近森武才公の

悪事古語麻万葉の狂言とらうこれの字

一こいふあふれきとたる

○今案古語麻六

こいふあふれきとたるはこいふあふれきとたるをいふ
けされ又たうはきとたるをいふ

一たつめたる水のつら

○今按抱徳座の未必の二ををこころごとくある

るあふれきとたる未決の詞よりしてしきりけり

をよめるあふれきとたるやのやまをいふ又水より

さして流出たるをいふこととよめるてよめるあふ

ほ今けりしとあり 和名抄云沫雨淮南

子注云沫雨潦上泡起若和名宇度益たかた

万十二いふかきもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

口十五えりれきたるもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

日七
天さうしひある何れ我を定む我多し紐とさせけりぬらぬや
常の事あつ山吹宇多我多無君をぬまぬ花ちり知やと
万葉もこれの多きやを思ふさ昔はか
にころあつと見えあり
思ひ川に流る水あこのさうか
一五もハなうりそとこひは落ふ

○今う栗凡俗も交むもまひかりそと何ふ日
本純は勿のものをすれと落ふいすなをちありれの
心定なり絲は五音通はまひのまれれは只
なみのこりよはゆと多しハあはあうりそと何れか
流が納まも池ハとあつとせよその池もハあ

己をとしんんもあうりそと何れか

東の池もあやむのかりそめを見をころふおあけら
おれも凡俗の事よりあるは今け凡俗をこし
陰におひももこのやのんをたぬおひもさうか
りおをひをひりうらハ強ふおいよれも玉座を
かうそをひそおのうをすれもあかこ
え多し事ハなうりそといふるさ
三枝

家せこおゆるもあやけの池のあもくれ別したやだ
けあまののちの相くれハ又こまきりおひ出れを
玉ももくれとりう万葉が弟二人丸の長あつも
大橋をおひておひる玉りそたぬれをあから打橋

おひをせれる^{さま} 川原をそかる^まハたを
とよめたる^ま似あり ちの方^ま玉盤をわく液
たる^まおひをかりたる^ま似され^まの^まと^ま
る^ま又かく大將^まあそ液^まさ^ま玉盤
の^また^ま教^まを^ま忘れ^まく^まか^まぬ^まお^まひ
ま^まそ^まある^まこ^まら^まん^まか^まら^まな^まひ
た^まんの^まお^まれ 細流^ま危^ま険^まの^また^まを^まり^ま
り^まあり^ま

一 何れもあれひき

^細ま^まそ^まあ^まれ^まひ^まき^ま
○ま^まあ^まれ^まひ^まき^まは^まあ^まれ^まひ^まき^まは^まあ^まれ^まひ^まき^ま

う^まれ^まあ^まれ^まひ^まき^ま
り^まあり^ま 万葉^ま同^ま也^ま 紅^ま之^ま襦^ま袢^ま道^ま乎^ま
中^ま置^ま而^ま 一^ま云^ま須^ま換^ま衡^ま河^ま乎^ま 才^ま五^まハ^ま白^ま女^まの^ま
袖^まあり^まり^ま 須^ま換^ま此^ま彼^ま
才^ま五^まハ^ま未^ま通^ま女^ま等^ま者^ま 赤^ま裳^ま須^ま素^ま河^ま才^ま九^ま
紅^ま赤^ま裳^ま敷^ま十^ま山^ま藍^ま用^ま摺^ま衣^ま服^ま而^ま才^ま廿^ま
を^まそ^まめ^まハ^ま多^ま森^ま毛^ま須^ま換^ま牌^ま久^ま評^ま之^ま庭^まと^まよ
め^まか^まこ^まれ^まを^ま河^ま合^まさ^まる^まよ^まあ^まれ^まひ^まき^ま
知^まる^ま古^ま熟^まハ^ま叶^まり^ま
一^まあ^まれ^まひ^まき^ま

○今按續古今之思ふ事、
 亦如前之其の思ふ事、
 亦如前之其の思ふ事、
 亦如前之其の思ふ事、
 亦如前之其の思ふ事、

源註拾遺卷第五

栴ろえ

苳ろ葉

苳菜

同下

加ろ木

栴ろえ

栴ろ

梅枝

一 ちりりの流き

○ 今葉 瑠璃杯なり

和名云孫梅切韻云

甌 時戦切俗語云
都岐乃波太 番縁口邊也

甌ハつキめのたこよ

毛流は悪縁あれを悪の字をつまもむもきや

一 それのえま いそんを

○ 今梅 新古今よ ち成之位

昔と小ころたつむる梅くえまたるあふさるれ神ふ
け今のあをまもる少似たり

一 足踏ふ人の流さるるこまよあれさふらあし
に 中野方集

あまののかきこめなる水手なをん不渡のなれぬれ
○今栞けち中智集よりんえんめり

秋葉女御集云

いづくのちたなる海なるか何しを神のうらみ

一古葉集

○今葉 夏秋の新撰万葉集よりひてをるん

一たんのかきこめなる

細 辰のめり

あつ 啄木の歌

○今葉 じんハ和名鈔調度中眼玩具云四聲

字苑云終

吐敢及俗音如含及

青而黄也

けりぬ 辰の

文といふハ終之 本音ハ吐敢及をせめり

後不渴アそりふゆ急よ奴含及といひるハ字延託

式の中ハお月くんえり

かきこハ同腰帯

類云 緋帯韻云

緋蒲草及今葉加良久美

織絲為帯

一をりくんえりやま

○今葉 古今よ

山すじんを世あめぬ櫛花いづかきこし部んをえん

一いしありひよ

盃 河海よありめとあり

○今葉 志るあハ後居るんハ又日本紀の形宗

紀よ身下をるありよよありかきこハ下居る

かきこいづくあひのあきとんすもけり

限りあまを座してまゝせの道うまかむ
 志業人の智業たふしなるべし我之もの侍人とあふ
 志の由さぬおちあふちり人さぬはおちさされて居
 系例ふ之志うひいある義なる道かづをた
 ほいあひの教を 己まてまてたうよりか
 るハおちるあり

一 運をまゝいふに其の法は少ありゆるな
 細き井の底のつぎあふまよのつまあるぢえかく
 つまあふまを運も志を中志さふまになるんあふま
 ハ志身の時々ある教又もさ海すといふ
 ○ 今案 け道たうまうなぬゆるなれと志の

動しひい出していぬ一物よ人のつぎなるハ志の法はの
 のつぎれそのいゝなりゆるをえりまはこれ
 其いゝか志やせりあの人まなるともあなぬね
 れなし人ハ世の志不志さうひてつぎあふたりゆる
 又志はしハ世をさふさうにせつぎあふ
 をえりて志をさうさふそまも志はあふなりゆる
 をとひい人まらに心をさうさふ又志井の
 原の志事浅行者せもらたれ

一 志をまゝつてんあふまるとして
 ○ 志業は世のまゝをいぢあひあふ
 志何し志も不志なるまは是路をさ

ゆけて案ほしつらふさるるあり
如意輪観音のふんをりて頼を望えぬを
思惟のふとよ 愛つら法忍つらよむ
もよるけむ

夜末抄

一 お座しとむきしよさるるはしるる
○ 々々 昔のたよお思たぬを片恋といひ
お座ふを徳恋といひなり是ハ夕暮ハ時大
にふまけむとや 祈る思ひ重む中
替まらぬのるをうとてむきしなる
かきけかけをるれぬハ徳恋といひなり
一 うちくのしとくあやまりも

○ 今葉

あさねらん 朝露のたさきハとあやまるよと
一 日月のつきもちこり

○今葉是ハ古方や徳を洗いし者ころんと
 不六部百二万のついでにあはれは知月のた
 ちきりな事ハかくしんを 万葉集六三目
 月のあはれも月をちてしてころ月とよあり
 一 ちきりあはれこのけうちうりし眼
 ○今葉けしハ奥之源氏の口道ゆひし内府
 のゆきや道とるも一其奥の眼一説は太夫人の
 不孝とてしうそれも未だ女とよこえし
 有連とあはれハけをけやうてしふはんころ
 してせんし
 一 ちきりか一のちし

○今葉孔子をさうてあふりしとてなりそ教ハ儒
 道なり

一 葉のうゝ葉のうゝちきんしん
 喜日たは葉のうゝをけちちてそちん
 ○今葉万葉 万十四 東部
 美之咲葉のうゝもあうゝもそ小きわあそあき
 け給白ハあをちしあしん之は撰の初もこ
 道をたてしあはれなる日たはせんあきや
 るまは 喜歌を 中徳也
 一 あしりきをこし
 萬葉集 催さそ

○今案まうよりしりしも 申談 つかんこ
 終の字日本紀并万葉よよよと 濱り
 もあつらひ 眞流の 衰へ来る 勢いと 阿多を
 万もあつらひ 神あつらひを せよめとよめるを
 也ひ 名もよよ 吾ふ 少ゆ 姉婦 としる け
 又車を のとろく やよ せん つか せ ぬ
 おとよめしりあれた おとよめ 父の 妻の 才の
 妻をいふ 宿之 弟の 妻 父兄の 妻をい
 としふ 和名よよいしり
 一申らてん 名もよよしりしり 神りぬらん 色
 花名 おとあけ 志きしり しいん ちや 弟も ぬ

ちやる 不ふ 道の 名も おそや なるま ころあ
 子宰相中ぬしりる あり
 ○今案をいしり 父も けりしり 殆く 酔て
 あやき さん 之 支とを 語下のとを 濁らん 上
 下も 不濁る 祀しり けりしり 祀を ちん
 今の 後 何しりしり 縁之 せりしり
 縁之 けりしり 續 弟 母 祀の 宣命 不ちれを
 ちん けりしり けりしり 祀しり 不しりしり おとあ
 けりしり けりしり けりしり 文書 けりしり
 けりしり
 一松よ ち 祀 せり 何 あけり 祀 けりしり

細麻

乃戀ある 杉より紀書 友をまとおのゝこゝろをそ花ハ
○今葉けおハ 費之 家集 古帖 新古今
さみみきりある 杉よ かまきとあまの 只今の
初ハあして 木よさふ 相あるハ 只今 只今ハ
詞をくして 元記

一葉のこめ 一母も

志ひさふ 志ぬ 抱も 受けも 昔のまも ありぬ 一葉
○今葉 けお けし した 杉ハ 古帖ハ 伊勢り 家集
恋ハ 昔ハ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ
二も 伊勢と 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ
ハ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ

忠孝の 志之 上も 似て 下ハ 海之 甲 只今ハ
乃襟と 古帖と ハ 只今 紀書 何れハ 只今 何れハ
たぬ 又 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ
伊勢 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ
これハ 好古 家集ハ 好古ハ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ
志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ

一かえらちの 志之 志ぬ

○今葉 古帖 第二 開初ハ 川口 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ
志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ
川口 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ
志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ 志ぬ

そに下とあはしてと内府を冥のあは
死あくくふきひくよるのりよしをゆき
河海を運するをゆきひてとあり
は引きたるは下白のころあうかつれきや
一あは死名をいひあう一守る

○今葉け上るハ夕暮のころもあひてのほ
そゆきもまきをふくしりて我いまけ
しとあまひしハまきよハあをのひ給
ふゆ涼かぬえ川口のほきつとく海きか
らあふるすのそこあひしとくしとくハ
只もらうらうそれを氷のりさしりふり

よをそいりもしとくしとく葉葉あたまよ
玉あへお痛あを小山田のあまきとくしとく
一云母之守之師 これよよらよ冥のあ
ら地ハ何さしとくしとくしとく割せさう
しとくをと内府をきまけあまあまきとく
ありあさましハけかぬんえあかこの浅
まきハさしとくしとくしとくしとくしとく
又一向を葉ひて全篇夕暮をよるれき
んああ死名を川きあのころいひあうは
心のせを死いりとくしとくしとくしとく川
口をうたてきたるあまはしにくま田の冥を

引若くはやわ かつらちりひてとハ夕暮の内
府を女のたまきけてさるをひき水の おふきる
をさふいあぬあやと おあきさるぬこころ
る又まけしとせしんもあまハこれもせし
しハいんきたりとくさるんもあえし

一よりみりるんき たの 雲を
○今柳葉多ハ陰奥の 郡乃名和名ハ木久多
と物もきくくの 二字久入さあよひあし
枕葉子 とも雲ハといふよ くらき 昔の 雲と
いさしり 徳 因 雲 枕とそ 今の 昔 流布 出る
小葉多とくたてくきたしよむ 俗ハキク

とりふと有 詞花集よ 崇徳院 御製

照ふも花よハキくくの 雲あまはちあは月もさる 何れ
影のハいまさふ 影もんくく せきさるしよハ 何
ぬと内府もくたあめの 雲のくさる しくく ちり
のひや つきあく 中し 路ハさるし ちふあ
あまの 今まてとく 二海う つきハ 偏ヨ ころとふ
ふのあさたよあ たちひ ともく お月さる
ちんハお月せきあ ちん と 祢ふ 何ん
忠見 ちん

かみは 雲の 色えらん 喜百也ハ 喜の 只さる せたるん
けよあはんハ 祢ふ ともえんハ 祢ふハ 何せし

おるんそ何ぞやあまのんあり下知あり
形少ん之上下のあんおれり成或治ふ何れ
さまはくり内府よりをあせり不登きこ
さああきんとなりと有り耳たあん人
きてわくあり

一あくらも志しけりあり

○今案伊勢集

玉きし事あらも志しけり新おを後も凡とあひけ
け上りの初を凡用しり

一くりん佛あやありて

○今案灌佛の佛縁をおしをりありわい

将率也これらの字

一かこくよりこくをくしり

○今案拾遺集 新恋よ 灌佛のこくを

をん侍りて よき人あしけ

か衣より落るありて我神あもよのや何あり

但乞ハ禁中の灌佛

一あこくやり少のうきよ

○今案からこつハ旦見えん ちハあこ

めのまよるハんなるの心 伊勢物集

毛毛のよきも人のあゆくらや及まわハこく

と何の心た似たり

皇嘉門院

彩衣今下小
何とや之よおふあふ此名もそれもたふ影身は
ここの名乃初を五用しそくくもや

一 ちきんハ新ハ思そあ

○今葉まー水ハ去法あつて 去ハるあつて
和名云日本記云 妙義井 之三 又六帖
飛舟のいさふ川のまゝの海でやあふ 君ひる石ハ
とよあつるハ 増あつとやえさう

一 ちきんハ新ハ思そあ

○今葉 つまあつてらんをやさるとハ待も波
心池心谷心たつひ池のこころ 谷のこころ なと

初もよめハ井のゆもりあつむうハちまを
のこそらんをやり給ひハ今ハ井のゆのこもまを
くやをこえ やをこハまき出あぐれゆくをりあ
しちよ ち段ち段をきれハこといつてとのこま
ハけち夕方とて井底よめ お何そんをや
をハかくへう

一 そのかこあおいハ

いそ人のあはれぬのいそいつうあ 少松ハこけせ
○今葉けち何ようんえさる 万葉集ニ
妹久み代はあまむむ 始常のちねうんハ昔もたよ

若菜上

一女の阿さむらじんハ

孟あさむくハ歌匠也と云う事有らん

○今葉歌誰の誰を匠と云ふ事ハ暗記の
笑話有らん

一まゝまゝと云ふは古くは元路不居事人もなればハ

○今葉まゝと云ふハ俗にまじりたる人といふらん
よめりうを手にをまんとといふ言不傳を手にを
まるといふ乃を知人ハうかひんと言とお
通しては不傳ありて申すんハ知れれば
なす言不傳也と知れぬ事有らん

言とソヤ 誠信等の字ハ乃の傳ありて不
言不伝と云ふ事有らん

一それほつと云ふ事有らん

○今葉ほつと云ふハ初め字云 古今不志の免

のなりと云ふはあやゆけと云ふ事有らん

又は葉式ア家集有り

うち志のひ歌も何せハ志の免れ有らん

一やも免をみわてと云ふ事有らん

○今葉 和名例云 鰥夫新名云無妻曰鰥

古類及 和名夜 言鰥然不寐如魚目恒不閉

者也又云 新名云無妻曰寡 和名夜 玉篇云寡

或曰媚媚曰發婦發程

やむ哉かむめい

れし通しを述ハかり也 中免之 かく男女

もろちていと 伊勢物語もむろをと

やも免ふてみせとみきみあやもをこりける

とこか

一にたろふおをやおををせ時えん

ふそよりつたを教ふあはせ像おををい

○今葉 此等何。出たりとふとを志し

一中納言あとい年いつくかろくもやうか

まをけとされとるて人かもつひよちやけ

のあししろくちりぬんきおひさきな免也

さもおほおんはなをこりこよあかん

○今葉 けこよあかんハ似甘さんのかえ

一羊満まのひり

細 威辨 何うてとこ 何 いう事か次女

○今葉 つましくもあまも後とあ

る。何れハ河海よも人ハ是ハ入乃まを

さこれお旅の後とあきまひりとのん

約のむとち 頼有る島の短くおれハ島を

若といふまなる魚

一肉侍のかんの魚ハつとまあひ孫ひて

八
○今案先ハ河海の誤ニ集ハつと云ふこと
ハ俗もつと近くも類つとをのくるといふ
詞なりそのまゝとあることハ誤なりと云ふ
一御心むことの

○今案 日本紀第二十一云善信阿尼等謂大
臣曰出家之途以戒為本願向百濟學受
戒法

一川ふか河なりとお尋え侍つ
河 人の芳老をそりせ海をりり河を朝志集歎き侍
○今案 朝志集ハ 奈白人の牙のしりり
あまりししそりさる海へ

八
今もれたきりる命を頼るおんたがぬやハ
一御まきりめ侍り存ん

○今案 まきりめハ 守目也 厚樸速集云
今伊勢の御まきりよりまきりの御
て侍り人ハ思ひてりまきりることをお尋や
けもきりてあつてまきりめを侍きや
まきりてあつてまきりるを侍りよれいよ侍
りしと 道雅三位のあのことちあり
一又今西の御まきりめハ

○今案 金葉集 恋よよ 友系惟規
池下も家名を考ふと西の御まきりるや人を恨

けあふもたふ。惟規ハ紫式アウ見之又夏秋方

地中

阿のちをたふまともまろあは果も足あ秋の菊

けえ区民ホ区民こあうりわう之枯り
五之民あももやとこあのあけて年きあをいん
一御前をああまの正出りしあをころるを

かひあまめくせを路へる

○今案 浮機集雜四立子院よさあひり
はあまこのあろくたまらせりりれい

いせの海は年へて信あまあまとかさるめろるはりを
又難一云 法皇をくめり沸くおるあひ

て山あま路ふ阿ひこををたしめあり
て女御おれを不記の路よさあひ路ふ
る二年といふよあんこを久すおのま
さうりる若のこくおあしあをあひん
おる路ふりこりてよる

一人のちあとりふあ

人甲を令さるるゆめよまこ人の中ときてたのなきも
○今案け川あハ万紫中アハ何そ板上司
女あえ養白ハ汝平与昔平 櫻白ハ包昔君
路白ハきこしあれゆめあり 又日節女
いあまのあこまよそあなあめああをあひぬも

かろるよりいそぐよゝるもあつて

○今案 禮記問喪篇云禮義之証非從天
降也非從地出也人情而已矣 和泉式部

法云と云そんぞありて人あまうろえあふらよ

一之よりなりて

河壁代 又防壁

○今案 和名鈔云 和名云縛壁以席縛著

於壁也漢語鈔云防壁 多都

縛壁も防壁もとりしきりてともみて壁代は

としかる

一らえんのもつてあそよらひ

○今案 日本紀弓矢 フタヨロイ 二具

一ゆするつぎ

○今案 蛭蛭日記はそれ申ある事はかくてや

むやもあつあんりとおきんはんはそりて

むの月よそつ日つひしゆきつぎの

いそれり何りるるちちあて何りて

一人よりしるるあひ

○今案 千載集雜上 上東門院より 六十

おとちひむひる時續侍り

法成寺入及為左政大臣

かゝるるをうせおの各の招とや年をつまじ

又紫式部歌集

あきらのよえみあはまきつきのふ代のねほりきり
一巻のあけゆくまに物のおもくもあつらひつらつて

○今葉 坂櫛

尾浦胡后

短衣のあけゆるきふさ袖のきりきり吹くさきさき
一めちうくくろきさうらうら

○今葉 あはくけおんをいひのこしとていへ

飯懐いささゆりよそいひのそせささゆいなり

一命こぼれしあともあめ免

○今葉 命はんまほせぬおるれを縁乾期

あはきめうもささこめをた葉のあひのこし

あはめふりの中乃契なるおを何の縁の初
の何むとさう

一これこの清きをいひよハかこやう

○今葉 万葉 亦曰

いそさくおきいけめもそくえの枕斤去さるま

一こまほすの事ハオあき

いよさあふふのあはれハあきをおきて今もあ

○今葉 け川あき枯は河さあ

指送 恋了

いそさくあふふの何の時ハあはれをさそを嬉し

けあさるや 暗記の失落もや又

後撰

信明

己の心をいふとまづかよふ家文を推して君を思ひ
けの下のうそりなりや何んか川あり
あふなりはつんぬ

一友まろ君のほろりよれらぬよ

○今葉 家持集

鳥のふくまか花梅は友まろ君をまゐり
君之集

梅の花やうもあはれやみよれ少く友まろ君のこゝろ
詩人玉屑は残雪のふりを侍伴とよむは是ら
ようくよまゐるよとされ侍伴差明をい偕御

とるう君の世よりあはれをいふもつと
てよめる花のつとよしあををよるよ

一これにあまよはるるをぬる

○今葉 古今

あをまてふをあまよふしあまよふを
けををよぬるをかくのこまふ

一あををかくおひるあををかく

あををまろをよるあををいふあをを
あををかくおひるあををいふあをを

○今葉 只老らるる人けあはれもあまよ
るあををかくおひるあををいふあをを

叶をぬふお存り候なり
竹取お終りかや姫を恋する五人の女よ竹取
翁出て石神るとかきこるをいひりし時赤子
しち上建敷ゆておいしりよ何ううよりしよ
か何うきこしやいのこまをぬとひひてり
てこれゆめを何う又 宇治旅述お終り
元楠う藤させしるをうりる赤い殿上人の車
お月あし人きこお見たりお見たりお見たり
いらしそわさしてらんかおまことおひてり
をいしあうり建いするらひておちぬと有
又おまねをいしとお月さおいしり不れた

まひてハあそといふるおもあり 於以と久紀
て旅情とわも老うりの心を引く 彼名を
たさぬぬ急はたらひの迷ひ多し
一いそこのうけハまをお海を記と

○今案

古今春下三つ
今案と春をよぬ時よも五正とやま記花のうけ
一山まそよりしりし

○今案山まそよ山のええ 万葉の山原と子
るをわぬのたもも ちまそえとも 無事
一牙にあう 船やまぬん
○今案

結とよ。そを穿しある人の都を。昔名を記れ
け。あを穿し。と。何れを今。身は。ちく。と。し。なり
新。古。今。恋。九。り。一。あ。ふ。と。侍。り。む。娘。の。夕。色。
あ。ら。う。な。く。免。て。よ。を。侍。り。む。上。原。古。古。は。な。と。
身。小。ち。く。来。ふ。り。る。あ。を。あ。ら。う。結。を。い。ふ。そ。あ。ひ。り。と。
これ。は。け。今。の。あ。を。免。て。よ。を。め。ん。と。は。
喜。世。心。は。あ。ら。う。い。ふ。父。而。は。何。れ。
古。事。紀。垂。仁。天。皇。の。辰。も。呂。遲。別。命。出。玉。の
大。社。は。禰。事。人。る。り。を。り。る。而。は。出。て。国。造。之
祖。名。は。岐。比。佐。都。美。飾。青。葉。山。而。立。其。河。下。將
獸。大。御。食。と。て。

一 乃をのまねいあも

○今案 万葉 亦八よ

秋の高なるや。なり。り。乃をのまねの。あ。あ。つ。い。ま。い。
こ。ふ。水。鳥。と。い。ふ。鴨。之。禁。の。身。は。喜。世。心。の。山。も。
え。り。あ。ら。う。め。り。喜。世。心。を。あ。ら。う。鴨。の。ま。ね。い。
え。り。あ。ら。う。そ。の。人。の。心。こ。も。存。の。下。代。の。鳥。身。や。ら。う。
ら。ら。う。ふ。え。と。い。ふ。こ。う。あ。ら。う。子。豆。津。は。菟。
の。下。代。と。い。ふ。こ。う。あ。ら。う。い。は。か。り。ぬ。を。そ。あ。ら。う。の。心。より。
お。の。な。ま。と。い。ふ。こ。う。あ。ら。う。遠。く。も。古。今。よ。
娘。の。下。代。あ。ら。う。今。も。や。あ。ら。う。あ。ら。う。の。い。ひ。の。え。り。
金。葉。集。 秋

を打ちて思召をくく鴨多におのまねも印あけり
千載集冬

加の所、石の意ハ頼り申ておのまねのこゝ地をたえんあつ
け言ハあめの意を思へる也(此)

一 口々おををききのふるやふおよまけ給ふ
○今葉 俗にも引のを戻やうもくふちあめ
おをのぶるよ 似るちり

一 おまろろ方どてらうう 法くうそくうおいせきも
○今葉 培於 日記云 天下の村草 法をとり
あつめやめつ くるくもおせんちとひひそ
そくううおるほほよまき 正にそくとりふ

初あうこれもああ 延喜式第八の噪のま

をそくくともそくを 法は古御とひなり 法く
心之又おれともふそくそまきたるとする 初と世
そまきたらうそくハ音便はそくハ法は人のくえ
こくうおそけ初こや

一 あくふくそくうちんのもち

○今葉 あとかと通してかこそくあま 日

一 くれ文んままるハめめいとま ころうて

○今葉 くれ文ハあまころうあてくをうてよま
くくく又勺糖もんを忌されをこまかたをえ
一 おろちあそくハくよあひも糖ふまもめを

○今葉はあはれけよのほひあつたあはれけな
 ていとふなまや 和ををさうたらひをさる
 子ぞやのゆえ 細流のあはれをきあはぬさう
 ちうしてせよと 阿のほの詞をこころあはれけ
 ぶくしととまよはあはれけおほろぎはあ
 のあはれまればあはれけいとふんてんてん
 あひて路ふハクよあひてえさまをさる
 なるいよひてあはれけとハふたうた
 一人あはれけまぬまぬれぬりて

○今葉はあの上りふらちこころけりてま
 ぬまぬれまぬまぬりてぬまぬくちあはれた

まふとちり

一いとうそそ思ひくまなれ御とくれ

蓋 ちひなぬあまんとハ人の懇ろをさるわえ

○今葉源氏の阿まうらなまそは心をつけ路ふ
 かしこまり

一こころあはれけりたりりり

○今葉よまきうつるハあまをさるうて系
 路ひハハはなすハとつまけあまハそひま
 こそ人かもあはれおちるハいなる

一よあはれけりてのほをさる

○今葉後の日本あはれけハあまハ一かをさる

ちとよめく ぼよ 鞠のわさこといふのもいれ
より出ておあしこころこ

一 かくこまこりあり

○ 今葉よれ白なりといふ

一 かくかりこまきものりけ

孟 前黄ハまこ 浅緑なる木りけ

○ 今葉 前木なるこ 上よゆ急何の急の本

互のりこ 急こめなるこいひて 急の急

もきれたる花の本もといふ 次よ かくる

を細流よ花ハちりこ 急也と 急ハ急の急

急ハ 細流の急ハ 急也と 急ハ急の急

今葉本と 急で地急も急なる本とをいひて
万葉集十よ 柳急不目急と 急で急なるも
やいよ急なり

一 片ハ急の急をいひて 急なる

花急 急えを急なる

○ 今葉 急なる急なるといふ 急なるの急なる

急なる急なるといふ 急なる急なる

一 片ハ急なる急なる

急なる急なるといふ 急なる急なる

○ 今葉 急なる急なる

急なる急なるといふ 急なる急なる

一 妻のたむげのぬきあつるよやとお母ゆ

○ 今葉

一 いまに花平木傳ふ葉は樹をこけて祢くといせぬ

○ 今葉は香のふい葉の花は木つてふまのり

いふ多しといと木竹よりハ樹をたふかるとる 祢く

といせきしてお母くハおの木竹はぬらんとい

源氏を常ふたてくといて葉のたふさく樹を

樹とせきといふハあは源氏も葉上のやうに

そよひ路つぬ女三のまのりといもをさく後

て宿たまぬよハあぬとい人を汗をす

一 妻のたむげ

○ 今葉 葉の事

和名云 陸詞切韻云 鶯

鳥茎切揚氏漢語抄
云春鳥子字久比須

春鳥也

万葉集 卷二ハ

妻をといふ記てうらひ花といふ

一 けらうひとらふとあぬんよ

細葉ハ花の本よと傳ふと

河妻の鳥あハ樹をらよとあはくまをたま

らぬんよあやまといや

○ 今葉 樹一とあぬんよとい方を樹をうら

とあぬそといあて下ふ竹よのり祢て樹よ

うかハ祢てといあハあぬんよ

とあぬをいふをといあぬぬよぬんよの

まればれたあまの祓々といはせぬとも免る祓
ぬといふものをやそとあぬといふはあはれ
下は夕暮の初よりあまきりむたおもむき
あれやいとしくてとてくも何れをよまは
やうんとしを事ハまきて様やとぬ物と
えはるハ流え細流のハ嘗ハ様ハ細ぬま
見流るは流るるハ河海ハ様ハ流る
ふとあまきをむくハのこハとあまハ
し流るは流るとんえき流るハけハ様
とくハふとあまきを様ハとあまハ何や
しととるはとのんをハ細流はおあし

一 山本は始とてあまのこもといはる花のあまは何なるま

河船 箱馬 或ハ魚名の又名とて

○ 今果 果多ハ万葉舟十ハかたはらとて 漢

日色ハあまの舟を 朝果とて又ハ山

といハ見之歎山を 日舟とてハ 見果石山

とくハ果音かゝるるを 傍て用たり

万葉舟ハ舟とてハ舟とてハ容を 舟十ハ 貌鳥

舟十ハ果多又舟十のめくもくハ舟十ハ舟

保等利とてくハ 船中ハ河海ハ 果多をば

そととてくハ 流え又万葉舟ハ 箱多

あし又ハ船ハ 箱多の次ハ 別ハ容多を出し

若菜下

一 今案 日本紀云云

○ 今案 日本紀云云 慨哉 大夫云々 慨哉

此云干黎多棄加夜 李善 秋與賦注

曰 慨 許既 說文云 慨 太息也 字林曰 慨 壯士

不得志也

一 今案 日本紀云云

○ 今案 日本紀云云

敦忠朝臣

いふでかたきふふをふふ人法てかて思かたん

一 今案 日本紀云云

○ 今案 日本紀云云 郭を布人 局を 在 注人なり

よあり 局 撰り

徳人 雅なり ありふなり 及ぶのなり ありふなり

一 今案 日本紀云云

花 猫の字 音めり 福のハ 五音通也

○ 今案 日本紀云云 注 叶を 尾 是ハ 猫のなり 彦今の

備ふなり 心 ありふなり 心 ありふなり

ハ ありふなり

無きなり 人のかきなり せハ ありふなり 何そ ありふなり

人のくきなり ありふなり せハ ありふなり ありふなり

何そ 将 ありふなり ありふなり ありふなり ありふなり

後とりあはしは少あせさるゝあはぬあはぬ
りよんをいつく

一 今業もあはむれとほゝ急まふ
細部あはむれをまゝむる

○今業勅をとりあはしはつげと和強り
まゝむとあはむれとわいをまゝむとわい
まゝむとあはむれとわいをまゝむとわい
てまゝむとあはむれとわいをまゝむとわい
かろをまゝむとあはむれとわいをまゝむとわい
をまゝむとあはむれとわいをまゝむとわい
りよんをいつく

うわきてあはむれとわいをまゝむとわい
も何ゆえんをほゝ急まふとわいをまゝむとわい

一 ちねもさるあはむれとわいをまゝむとわい

○今業志さるゝ下形へ假令後の朽木

うれのこゝろ下化といふはあはむれ

一 考り昔のあはむれとわいをまゝむとわい
人をまゝむとわい

○今業系也弟二人唐妻死之後哀慟作歌

玉不の乃ゆまゝむとわいをまゝむとわい

才之巻 石田王卒之時山前王哀傷作歌

河川のあはむれとわいをまゝむとわい

一かきしの花波しるくハ秋の暮来とあるけちめつる
まて

○今葉ゆれてあてま〜清く〜おろ〜秋の
月中の十日よそ下にもいと志あつ〜うれ〜る花をか
さ〜と〜るり冬ハ魁の末あまハ秋の暮とい
ふれ秋を物そ〜れ〜る。まなまハかく〜ら
もあつ〜

一山あのみふまき〜竹のあ〜ハ

○新勅撰ふ

定家卿

ちりもせ〜夜よまねる花世のたまふのか〜たさ〜ら
世あ〜この 詞〜をよまね〜るあ〜

一花このえ枝い〜る〜ひあ。

○今栞貝ハ〜せ〜ら

一う〜のま〜め〜の〜ら〜け〜ち〜め〜あ〜ま〜を〜り〜き〜ら〜ひ〜む
ん〜ら〜は〜し〜ま〜て〜ま〜め〜ま〜あ〜ら〜う〜ら〜こ〜を

○今葉是ハ四位五位等位よ〜ら〜て〜ら〜ひ〜を
も〜ら〜る〜を〜り〜あ〜れ

和名第十三祭祀具云

本朝式云土月辰日宴會其飲器参議以上朱漆
椀五位以上葉椀

和語云
父保天

是〜よ〜有〜て〜ら〜有〜職

よ〜花〜ぬ〜〜ら〜ハ〜危〜君〜の〜あ〜ま〜ん〜も
お〜し〜ま〜さ〜〜これよ〜ま〜も〜よ〜ま〜次〜弟〜を
〜と〜あ〜ま〜

一馬をひ

○今楸

オムウミト御者

日本記

一めをばひいふ

○今葉をとりと お似たりあるはふふや

いふは 何れを

影

日本記

一いふ方のぬきけ

河

齋

日本記

○今葉日本記は

一人のひをひ

○今葉

有意

日本記共
天武記上

一葉はもとより子人のひをひたりぬきひ
りてをいとわりて 跡も引つらむ

○今葉川わたりてハ 琴の縁をそりたり

一このころも 志めまゝの屋をいして

○今葉 志めハ 令憑とす 何のころ令深
るへし 志めハ 志めハ 志めハ 志めハ

一葉のひ方をのぞき 志めハ

細夕葉 志めハ 志めハ

盃 志めハ 志めハ

○今葉 細流は志めハ 志めハ

ハ 志めハ 志めハ

又あし 志めハ 志めハ

志めハ 志めハ

ちを橋よとく人をたうてこれよりまをさふ
よりいしよもそをさあぬ人こといふまを
ちよのゆりえ

一ふ まちの月 細二月十九日

○今葉孫まの月 ちく 師傳おのり
まハ ちるちる人きり

續古今 意三 坂上是則

福そけい ちるの月れをうま あひうさるをいふ意三
日報よは ぼる相院 ちく おおちあし
時出のりよさあしひて ちく 東の比まうり
出るを頼とめ作せしきり事九

兼仁法親王

まもこまハ 孫まの月乃こまおめ出せし 彼ぬをのさ
けこま 明院

新勅撰 意三 殷安門院を補

徳人たすて 孫まの月 親をうさるまよ 我証
是ハ 孫まの月 何れを ちく 東の 兼も 知
くく 昔より 十九日といふ 説るるや
凡雅集 意二 伏見院 御時 六帖 歌を
んよ ちよまの ちよめ ちよひ ちよふ 一 兼も ちよ
ちよふ ちよ 兼
夜うれをむ 孫まの月 ちよ ちよ ちよの 兼も ちよ

これ十九夜を 祓まちとよめる 祓り十九夜
をいおきいし まちとらふた 古物の新よ
君をのこおきいし まちとらふた 古物の新よ
十八夜を 祓まちとよめて 古月を 祓まち
とりふあをいし まちとらふた 古月を 祓まち
よふまちとらふよや

一かろやうちとらふよの 祓まちの丁急より 祓まち

○今業 伊勢りかり

よをあをせうかくあををいし 祓まちをいし 祓まちをいし 祓まちをいし
け初をとらふて 祓まち

一妻のまふれたら 祓まち 祓まちのまふら

○今業 祓まちの上妻をめて 祓まちの夕景世人よ
んのかれい日ん 祓まち

一足んちとらふま 祓まち 祓まちのまふら
あん 祓まち

○今業 祓まちのまふら 祓まちのまふら
一あや 祓まちのまふら 祓まちのまふら
をえ何んは 祓まち

○今業 人のまふら 祓まちのまふら
とらふま 祓まちのまふら 祓まちのまふら
ありあや 祓まちのまふら 祓まちのまふら
むら 祓まちのまふら 祓まちのまふら

あるひいふか記よよと琴わえ露籠をよ
引とえ一事を執るらんありたるあつとハ
なすけりよまらるやこれこころえ

一わこんいをまじりてまいたるぬぬあは侍めるを
いそかりこく

○今業夕暮の葉よのゆひまのかるあまを
てかくとるぬり

一あまりこころかこちあたまのい

○今業 純のまのりこあともいこれハ
こそゆいよもいんあまのまよりたると
我がをく 後をぬるまても我が徳のやよひ

♪をかりこまふんえ

一よ後つのおの神のうちふあまうひて
細徳の樂意琴の音よあまうひとる

○今業 琴の音れ徳のまあまあま
いんるぬん

一よこのそのりこれこころにうあむ

○今業 今の音よむく琴の音いつく昔
のりこえいも似むとりふんえ

一押れよりてやあひし物よりハ今まもあ
らふあんと思ひえ

○今業 新古今雜下よ 守覚法親王

かゝつて昔も昔もいふはれも久しう命をり
是のこゝの詞もいふもいふもいふもいふも

一 流ひよるかゝあつて丁々あめれ

よるかゝあつていふあり河海はたの白浪のおか

○ 今案は身何よりそ引連しるよや

一 身もぬるこゝ

小町集

河海はたの白浪のおか

○ 今案小町集は二二のわかれあひひ

あをぬよはめけ何り是は思ひを火をあした

引連しるよや

河海はたの白浪のおか

うらりぬるこゝいふはれも久しう命をり

一 身もぬるこゝ

河海はたの白浪のおか

○ 今案蜂吹ありこゝをみそ

つけぬよふもいふもいふもいふも

搏虎者不能不吹蜂 取意

一 身もぬるこゝ

河深著 日本紀

○ 今案日本紀は深著を志とよめり

通しそみおか

一 身もぬるこゝ

○今葉

長閑の才をいつつよなきもそらあひよりけり
やいといひてなりをせぬとよきハ落忌ハ才をいつ
つよもあきつとらう 竹えおけよあひ
ふ阿らうよりたふあ何しそとやいのこまえ
ぬこりたるもつよあき 女今ハ伊勢
高よ人のかゝ阿れやいせぬとよきより 彼集
後撰の他志中々阿まよめ。留之後ハはく
か

一 瓶のまよもつよ くらうく あり

○今葉 女今ハ

おのるよりくらうく 月の影を連らんつらうの秋ハまはる
一 おきてけまもつよ 運ぬ明々事よいつくの雲乃
かゝ 袖え

○今葉 元博集よ 人のまよよりくらうく 又の目

さ夜涼に袖にまよかりしをいつよおく雲おあきん
白花恋下ハハ袖のむさよ涼に落し雲よぬき
くんと何り袖のまよかりしハまよあつてハハ
こすう 袖の雲ハおきつんとあり 今の柏木
是ををまよとらん由まよ志し運ぬとていつく
の雲といふをおあき 古原よ本ををいつく

たるはもあつたけつらなを 坊々也さうりなるよ
やきこえきりる流あり 續古今哀傷は清慎云
んがに袂をぬき 楊花より那の寄やおくん
かゝ袖あつたを 正徹六松木んもつてあきうち
のちちれたてふをえのち別もなりとやされ
るより 近江君うちなとこそ 或人か
ふあをせや ああ げよのちあ くれとそれ
てふをたたるるよりあ 松木のるも 或
作へ書出さるるよりあよてふをえ遠くより
まんやい右方の係を記りれらるこころこ遠
く不ハ何ん

一あけの事のみあつたけつらなを 坊々也さうりなるよ

○今葉 新古今 悉二後徳有たは
さめては多しとあつたけつらなを 坊々也さうりなるよ

極政右政左

一今葉 拾遺集よ 東三條右政左長長
牙も今その付も消あんあありらるとこあるはうりよ

○今葉 拾遺集よ 東三條右政左長長
大京野之のつ不せこれつをり 何あな
なるりもみよとつふとをえらる 是をえりるれ

一あめけらるる志つこ

○今葉 輕 日本紀 無禮 万葉

一いしまり

狂言 万 辛 曲字也

○今案 万は狂言ハまりと云まらりといハ
よもも 日本紀ハ 禰の一字又禰害の支字を
まらりといふなり 延喜式第八ハ 悪事ハをま
らりといふなり

一不動そののありとのちりみ ありその日りまを
ふりけらめなり ぬと からよりまらり
ふらりありをいふなり けんをあらうてかち
しるなり

○今案 不動者 立印儀軌云 彼次 觀自身成
本形像 以真言大字 布身 諸支分 二百由旬

内所有難調御鬼神所持者 皆悉能數壞
又正報盡者 能延 六月一住

一いしまりきこふらん なるなり

○今案 妙高を 經佛をといふ 罪のり

一いしまり

お 五戒ハ 沙汰戒ニ 不及十戒ニ

○今案 沙汰戒ハ 五戒ハ 在家の優婆塞優
婆夷の戒ニ 淨行のくまらうむいハ 八戒
戒をいふなり 十戒を 沙汰戒といふ
一おのりもいふなり けりなり

○今案 及撰 なるなり

右たす

さひあえあそを今まをいふれあやあく君や海かき
むのつふくとあそふもあそ

○今葉情情り死もむのつふくとあそふもあそ
一何そ人のあそをこそあそふやうあそふ死れ事

○今葉何そ人のとあそを切せよむ
一あそあそもあそふ人のあそふあそふくハ
あそえぬと

細 松あよるあそふそあそふあそふ
○今葉さあそふ人のあそふあそふあそふも
それあそふあそふあそふあそふあそふ
一うちよりあそふあそふあそふ 御使

罪女三のあそふあそふあそふあそふあそふあそふ
○今葉けあそふあそふあそふあそふあそふあそふ
くあそふあそふあそふ

一朝夕あそふあそふあそふあそふあそふあそふ
一あそふあそふあそふあそふあそふあそふあそふ
あそふあそふあそふあそふあそふあそふあそふ
あそふあそふあそふあそふあそふあそふあそふ
あそふあそふあそふあそふあそふあそふあそふ

一あそふあそふあそふあそふあそふあそふあそふ
○今葉あそふあそふあそふあそふあそふあそふあそふ

けりしういふもといはくあはるゝのんていふはたし
つゝの書のかる神ありの転記

一法もどころのくめりて

○今案 作抄所

一かゝ年もせあつこと

○今案 推きは

一まゝのめりわし人を信する年とせあつこと
一まゝのびるまゝのめ

摩訶毘盧遮那の御誦經何うとん

○今案 摩訶毘盧遮那の法を撰りて

大日經の何なる誦經とて終らば又抄り

大日經の書を大毘盧遮那神慶加持經とかけら

が神慶の上不成佛の二字落しうり

かゝる

一 志ひてうけをなれん

○今葉 父母よりけを承けしる命もくひか
く又 又孝の罪も重くくまきりてをひて思ふ
心をいそのんじてなり

一 石のめあつたおしひの月りしうと

細橋政もぬぬくまきり

折是のききたりこんかろしん

○今葉 上は何事をも人よハ今刻もきハ
まきりんとしなすこくまきりし細流のけを

一 志ひてうけをなれん

何の所

○今葉 六帖 牙に眼影。 他志あり 胸のふ

ふかきしき 丹波集より源明の詞も

さすともきや あまのめを記するともいふ

たれもあまのめを記するともいふ

たさるまきりしきりしきりしきりしきりし

一 志ひてうけをなれん

細流のけも眼影のけもいふ

○今葉 けを承けしる命もくひか

んかきりしきりしきりしきりしきりし

おとろて 病とまをなれりしきりし

一今いそぐもえむ烟もむきぬ道たえぬさひの程や海人
河は世をなほなむとふくせもえむ烟のむきぬ道つ
○そ業け身何より出るる

一かゝるものともむくみわて
さやうも借ありぬ 猿意はむくみきまふる
もなれをさき

○今業け道ふけよな程もやきたる可申て
おろしむし流ふおろしのとく死つけきられ
心ちとらりきくさくさめのもちむる
ふき人よ云さう

一はとひちあり一即一の才もろくも外りや

河
さひてよるがふ我おハ申さるもくさうなり

○今業け身何より出るにけお後より後
ちれと出ぬりあり

一おほきりの流さかひ
おろして海とさひし即ひのねさきひて今ハ海な

○今業け身何より出るにけお後より後

こちとさおんさるり内よいつけさかえ何う
あは

一よふりくまそ出させ路ふ
盃業不常不友流さる

○今業けに業程のかけの借ありのこちを
ねとさう又とかくきこえうくさひおんわ

らふをふ米あけりふちりぬき

夜の伝を月へし 夢の夢集

夢の夢集より 夢の夢集より 夢の夢集より

一 沸くよるしきし 寝ふま

○ 今葉は公より 寝ふま

一 あはしりあやしいあ人あ

河 あ人あ人ハ有方人

○ 今葉あ人あ人の教人して 堪る人の言

一 今葉あ人あ人の女あめいといと

○ 今葉あ人あ人をくく入ていといと 女房の中

は 糸ををこなりと 足るもの何んやきりぬ

とちれと 糸はつ連外 洗うてあハ糸雀か

よの玉眼りくおほめもを思ひてのを

返て堪忍まへし 糸はつあれを何と

さんといふまかると志し せハ女三の御と

くけきハけあをくく入ていといと 人よひと

あやせとハ彼出こめいといと 糸はつあ

一 誰ものといふし 糸はつあ

○ 今葉 万葉中 二人丸

あはし川をみわくし せまをなほあめもの

一 今葉 凡こあちの上ハあうこの人の

○ 今葉 凡こあちの上ハあうこの人の

ろけの正あしむしととりも也 或源よおほろ
きかぬるぬるでいとくとりるハらるる好
りて本あよいとぬ言をそくし
一 此のいのちの正何うなるをそくしおひふやま
くも見えしし 此をそくしおひふ

○今梅或は女しそいらの西を白とくはし
より下はしきり 桜木と落葉の中を御是
一の乃たまふ也 宗此をひのよみくは
るり得めるを何うくしむとすむし
借脈はさあしハ今ハとく 是れしりふ
づけちり

一 一ものあしむしととりも也

○ 花法よをりきしるん

○ 今梅或は女しそいらの西を白とくはし

より下はしきり 桜木と落葉の中を御是

一の乃たまふ也 宗此をひのよみくは

るり得めるを何うくしむとすむし

借脈はさあしハ今ハとく 是れしりふ

づけちり

○ 今梅或は女しそいらの西を白とくはし

より下はしきり 桜木と落葉の中を御是

一の乃たまふ也 宗此をひのよみくは

るり得めるを何うくしむとすむし

借脈はさあしハ今ハとく 是れしりふ

づけちり

殊放者トカケハもきまけあめ流よりなるふ時ふさくキモもの
曰中ト十よ

殊落者トカラハ神キえぬまことけえくふ人を者のまきけつ
蒼家万葉ト

丁ひひぬれをよふ玉桂殊者ト秘えよふて想え
是らのまきやうめひあふの物よ何し流俗よ
ちがたを何とせんとりふちがたをよ似しう

細栢本とかくそのやうになき枝を何しハ故
事の流のゆきとやなきこや

○今葉は頂叶を流やかりの枝よあは
ちんとい葉と故取の流といか一葉と四と

の連理さるこく、ああひてこもやうい申うく

て君のこをもちたれおつちトハかんトの君と想
ひてあしきあくと女トのまトよトひトらトんト

一有してこもあふより人をよめひ何しよ

○今葉 万葉

いせの流人乃能るりあふかくてふまめふをりしうれ
けのちの初えうをえしうれ

横笛

一 世をわかれ入道に朽るも木命を君もよ
 ○ 今葉 世をさうれハ筆の縁お前ハハ燈を
 およせ君ふよる子よハんさううくほろ出させ
 て侍とひまよりけてさう人ハ女よの山道ハの
 うれせふえあぬあ又日ハ
 一 今葉もいま世をさうれ竹のこいせえうれ物まをさ
 ○ 今葉 是もさううあをさうふさう 持て志
 つくもさうにさひぬりハ 珍人ハさうさうけて
 くれ竹のこハ 持てれとひをさるへハ
 証をさうとりふハ 葉をさうよハのめよハ

御事ハありとあつとりハ 津をさう流てあ
 をいさえ

一 まさふふのいれおハハれお前ハ日をもさぬた

○ 今葉 上のあ初の二百ハかうてさう

一 ささるまハ君をさうてさうれ何さうぞう

河多集 万葉 潜 皇

○ 今葉 潜の字万葉よさうさうと 潜さるさう

即又ちさふさうなる

一 上のをさうえにハ 持さう

○ 今葉 後撰集

乃 鑑母

お前ハさうつれもせえ上のをさうたり月を海をさる

の代ハ敵をとかくハ三摩耶ヤ那受荼羅ヤなり三摩耶
 耶ヤ本相の事有り學問を好む人ハ其を
 疑ハ老耄を好む人ハ其を疑ハ物をもて表
 して其の所相の法も物をよめて表
 して之を梵字にて檀子を以て法曼荼
 羅ヤと云ふや茅草を錫磨曼荼羅ヤと云
 ふの云様は其を以てを縁ヤと云ふを刻
 佛像を作りて其威儀事業成徳の事を
 括て錫磨曼荼羅ヤと云ふ錫磨をけよヤ
 業と翻ヤと云ふ
 一 けりーのほりあり

○今業 挾侍菩薩 日本紀
 一 經ハ六道の流せれよヤ 六劫カセ給ひて
 ○今業定意ハ母の事あり自ら法華經
 六劫カ給へるハ是ハ法華經カ給へるなり
 一 けりー 河計 又場
 ○今業 界の事を以
 一 婦の事ありケル
 ○今業 佛の事をけよヤ 法を
 一 佛の事ありケル
 ○今業 寛响と云へたの事濁ヤ

和名鈔云 説文云唇吻

上音旬久知比草下音粉久知使岐良

くちさきくしのゆくりをいふハ 無舌なるをいふ
一やぬりたりきるいとをみよそく死候す

○今案そく死ハさくくこころ

延喜式第八大殿祭祝詞云取苙月

計草の噪岐

古語云苙と岐と何これるや 俗よいそく死

くち居るをそくくしとそく死をいふ

の上の何まかなると 俗そくそくくお路ふと

いふよおあし一御

一たこの秋をいふとあつみをあつむくをいふと

○今案 娘をハ源氏の心をのこまふといふと

初そそひの卯なるはこ 源ののこまふも

あやうとそそひの卯なるはこ 源ののこまふも

あつむくをいふと

一とまふのやうをいふとも 程きむのあつむく

○今案 あつむくをいふと 源ののこまふも

をいふとハ 世を換ふをいふと

かみたるおろのやうハ 縁をいふと

高波路久と何を恨めふまそハ 縁をいふと

下ハ 縁のあつむくをいふと

女をいふとハ 縁をいふと

一 心をいふと

細盛あり。世を捨て志川字侯路へ。こゝろ
を人をもて
○今梅只心をくふくく盛あり。世を捨て
あつてまていひたまへ

